

We are walking on long trail

角田 彰久	同志社大学経済学部生
奨励者紹介〔つのだ・あきひさ〕	

神に従う者の行く道は平らです。
あなたは神に従う者の道をまっすぐにされる。
主よ、あなたの裁きによって定められた道を歩み
わたしたちはあなたを待ち望みます。
あなたの御名を呼び、たたえることは
わたしたちの魂の願いです。

(イザヤ書 二六章七―八節)

「新島メモリアルウォーク」との出会い

経済学部二回生の角田彰久です。よろしくお願ひします。僕は、昨年「新島メモリアルウォーク」に参加させていただき、そこで様々な素晴らしい経験をすることができました。今日はそのことについてお話しさせていただきます。

まずこの「新島メモリアルウォーク」というプロジェクトの目的について説明します。この同志社大学設立のきっかけとなった有名な出来事がありました。第六十五回アメリカンボード年会の最終日、準宣教師として日本に派遣される新島襄がグレース教会の祭壇に立って言った言葉があります。彼は「日本にキリスト教主義の学校を作りたい」と大志を語り涙ながらに献金を訴えました。集まった献金の総額は約五〇〇〇ドルにものぼったそうです。皆さんの中にも知っている方がおられるかもしれませんが、献金した人の中には二ドルを差し出した老農夫がいました。この二ドルは老農夫の帰りの自動車代でしたが「学校設立のために」といって新島襄先生に差し出し、帰りは歩いて帰ったと伝えられています。僕らは、そのようなニューイングランドの人びとへ感謝しつつ、その日歩いて帰った農夫の追体験をしようということでアパラチアン・トレイルを歩くことになりました。

それでは、去年の四月から九月までの出来事を僕自身の感想も交えつつお話しさせていただきます。

四月、僕はまだ大学に入っただけの初々しい一回生でした。当時は、まだ友だちもおらず一人あひの広い京田辺校地をうろついていたとき、偶然にも学生支援課の前を通りかかりました。そのときそこに立てかけてあった看板に書かれている文字が僕の目に飛び込んできました。それがこの素晴らしいプロジェクトとの出会いでした。もちろんこのとき僕は、二ドルを差し出した農夫の話などつづ知らず、ただアメリカという異国の地で面白いことができるということで応募しました。

僕は、ちょうどゴールデンウィークが終わってから練習ウォークに参加したのですが・・・ここで練習ウォークについて少し説明させていただきます。練習ウォークとは、実際に現地で一三〇マイル歩くためにメンバーの心身を共に鍛えチームワークを充実させることを目的として、主に土日に学生が主体となって開催されていました。僕は今でも初めて参加した練習ウォークのことを鮮明に覚えています。その日は五月にしては気温が高く、息苦しかった上に前日あまり睡眠がとれなかったため体調はよくありませんでした。服装もジーパンに普通のシャツといった普段着で、履いているものは底の浅いスニーカーという、長距離を歩くには不向きな格好でした。最初会ったときのメンバーの印象は、本当にいろいろな人がいるなあというものでした。出身地はばらばら、回生も学部もばらばら、大学の職員かと思えば見かけだけで大学院生でした。しかしながらみんな何か熱いものを持っているのを感じとれました。この日は京田辺校地の正門から生駒山までの約四十三キロを歩いたのですが体力に若干不安を感じました。

この日から、個人的にジムに行ったり、家で筋肉トレーニングを心がけるようになりました。

六月、七月と練習ウォークは続きました。それと同時に進行でアメリカ行きに向けての会議も開かれていました。この時期の会議中、僕は自分の考えをなかなか言えず下を向いていることが多かったように思います。今から思い返すとこのころの僕はかなり無責任でした。とりあえず全体の流れに乗っていれば何事もうまくいくだろう、という甘い考えが僕の頭を支配していました。このため僕は、自分の意思に反しても人から言われるままに動いていたという気がします。更に最悪なことに歩いていくうちに体力自慢となってしまう、メンバー全体で動いているという意識が薄れていました。ちょうどアメリカ行きの学生の選考もあったので、歩くことだけに集中していました。

そんな僕でしたが七月の後半、春学期期末試験期間に入りちょっと変わりました。試験前なので黙々と勉強していたのですが、人間、嫌なことをしているときは、おもしろいものでやたらというろなことに目覚めてしまいます。僕もこの時「本当にこのままでいいのか。ただ与えられたことだけを坦々とこなしているだけでいいのか・・・」という思いに駆られました。七月の後半から僕は新たな自分に目覚めました。会議にも主体的に参加していくようになりました。ここからだと思います、僕が、大学って楽しいなあと思い始めたのは。

夏合宿を経て

八月に入ると、以前からメンバーの間で計画されていた夏合宿がありました。今まで土、日曜日限定の単発の練習ウォークはあったのですが、五日間ひたすら朝から晩まで歩いたのは生まれて初めての経験でした。この合宿で共に五日間を過ごし様々なことを共有したことで、全体としてのまとまりができてきました。このころから個性的なメンバーが、ある意味一致団結してきたように思います。一日に五十キロメートルという長距離を歩いたり、新島襄先生のお墓を訪問したりして最終日のウォークを迎えることになりました。最終日、同志社大学京田辺校地の正門をゴールとしていたのですが、この日の正門の印象はいつも通学している時のものとは一味違いました。あれほど正門が輝いているように見えたのは僕だけだったのでしょうか。正門に到着した分、ある種の達成感を得ることができました。それだけメンバー個々にとっても全体としても厳しい合宿でした。ゴールした際の全体写真を今でも大切に保管しているのですが、自分で言うのもなんですが、すごい思い出しています。ただ着ていたポロシャツは汗まみれで、もう目もあてられない状態でした。ウォークの終わりににはいつも ONE PURPOSE と DOSHISHA CHEER を歌っていましたが、 DOSHISHA CHEER は僕らがオリジナルをアレンジしていたので、かなり厳（いか）つい感じになっていました。

八月後半、和歌山県の熊野古道で第二回合宿が行われました。僕は今でもこの合宿のことをよく覚えています。実はこの合宿の一週間前に奈良県の山に登っていた時のことです。連日猛暑だったのですが、思いがけず食中毒にかかってしまいました。症状は重く〇―五七の一歩手前の状態でした。しかし僕は根性で何とか耐えようと思いこの合宿に参加しました。一週間腹痛でほとんど食事がのどを通らず体重は十キロほど減っていました。嫌な予感はしていましたが、その予想は的中し一日目から体調が悪く、すでに体力は限界に達しており、全くといっていいほど体がいうことをきかずリタイアを考えていました。二日目は天気予報的中し台風が近畿地方を直撃し、寺で動きが取れなくなり、そこで宿泊させていただきました。その日の夜は何人かで寺の階段に集まり、徹夜であれやこれやとしゃべり続けていました。

次の日。この日を忘れるわけがありません。そう、この日から本当の意味での僕のウォークが始まったと言っても過言ではありません。僕は今までの自分をいい意味で打ち破りました。合宿からの帰りの電車の中で力が漲っていました。ここが僕にとってのターニングポイントとなりました。

八月の終わりには、学生支援課のみなさんを交えた全体会議がありました。何度か会議は開かれていたのですが、この会議は珍しく新島襄先生に関連した勉強会がありました。よく考えてみれば、この日初めて新島襄先生について詳しく知ったと思います。彼は日本を脱国するのが死罪とされていた時期に函館から日本を離れました。彼は脱国するとき、一体どのような心境だったのでしょうか。自分の目標に向かって突き進む一方で、拭い切れない不安もあったのではないのでしょうか。しかしながら不安があったとしても彼は自分の目標に突き進むことができました。僕は、それは彼が様々な素晴らしい人びとに運命的に出会い助けられていたからだと思います。人間一人でできることは限られているかもしれませんが、しかし熱い何かを持っている人々が集まることで、一人でできること以上のものができるのです。

九月に入り練習ウォークも最終回を迎えました。この時期はアメリカ行きの準備や現地でのパーティーの準備に追われており、夏休みにも関わらずまじめに毎日学校に足を運んでいました。

アメリカでの経験とその後の自分

ボストンにはデトロイトを経由して到着しました。僕らはアパラチアン・トレイルを歩いたのですが、多少のハズニングがあったものの、これまでの練習のおかげでみんな楽しんで歩ききることができました。一言で言うと、このウォークは本当に素晴らしい。異国の地で共に何日間も歩いた仲間。一緒にいればもう僕らにできないことはないと思ひ込んでいました。もちろんゴール後は毎回恒例の ONE PURPOSE と DOSHISHA CHEER 。この二曲をジョンソンチャペルで披露させていただきました。これはかなり受けがよかったらしく現地の学生が非常に興味を持っていました。アーモスト大学での大学関係者とのレセプションを終えた後、学生に誘われるまま JAZZ の LIVE に行ったのですが、その場にいた学生と話などしているうちに、出演しているバンドとセッションをしたいという衝動に駆られました。ウォークのメンバーから力をもらった僕に柿いものなど何もありませんでした。持っていた借り物のギターで飛び入り参加しました。よく言いますが、音楽は国境を越えるということをこの時実感しました。次の日は現地の学生達との交流会でこのプロジェクト用に僕が作った曲を

演奏させていただきました。まさかアメリカで自分の作った曲を演奏するとは思わなかったので非常に嬉しかったです。アーモストを離れるときに現地の学生から「また帰ってこいよ。またセッションしよう」と言われたことをよく覚えています。帰国後にアーモストのライブハウスから出演依頼のメールが来たのもいい思い出です。

僕は自分の思ったことを堂々と言え、僕のやることを認めてくれるメンバーに出会えたことを誇りに思います。彼らから素晴らしい力をもらいました。また、このプロジェクトでは学生支援課の方々に助けられました。このようなプロジェクトを作っていたことに本当に感謝しております。その他僕らを支えてくださった大勢の皆様には感謝申し上げます。

みなさんからたくさんの力をいただいた僕は、この春九州から関東まで自転車で走破してきました。そこでも様々な人と出会い刺激を受けてきました。会う人会う人から刺激を受けて僕は成長しているように思います。

何人かの力を合わせることで一人ではできない大きなことができるようになります。これは、僕のこのプロジェクトを通しての素直な感想です。僕の中で新島メモリアルウォークはこの長いようで短い十一日間で完結しました。新島メモリアルウォークに参加したメンバーとは本当に貴重な時間を共有することができました。短くはありましたが僕らは同じ目標、つまり同じ道を歩いていました。今の僕がここにいるのは気心知れたメンバーとアメリカでの数々の出会い、その他大勢の人びとのおかげです。これからも、お互いの人生は違いますが、僕らはそれぞれの道を歩んでいきます。

We are walking on a long trail . まだ旅の途中。

以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

二〇〇六年六月十四日 同志社スピリット・ウィーク

水曜チャペル・アワー「奨励」記録